

## 環境に、人にやさしい住まいづくりに一役買う製品を提供する

山崎内装工業株式会社 京都府木津川市

山崎内装工業株式会社は、昭和35年に山崎彦一氏が相楽郡加茂町（現木津川市加茂町）河原の現在地で山崎彦一商店を創業したことに始まる。

昭和41年には法人成りし、山崎内装工業株式会社に社名変更。3代目となる現社長の山崎芳孝氏は昭和61年に代表取締役社長に就任した。

同社のある木津川市は古くから壁紙、ふすま紙の産地として発展してきた地域で、その地域に根ざす企業のひとつとして、創業以来一貫して織物壁紙とふすま紙の製造を行っている。

### 会社概要



会社名：山崎内装工業株式会社  
所在地：京都府木津川市加茂町  
河原中垣内50  
電話：0774-76-3151（代）  
FAX：0774-76-5102  
創業：昭和35年2月  
設立：昭和41年4月  
代表者：代表取締役社長 山崎 芳孝  
資本金：10百万円  
従業員：14名  
事業：織物壁紙、ふすま紙の製造

URL：<http://www.yamazaki-naisou.com/>

### 常にお客様のニーズにマッチした製品を

「昨今、人々が何を求め、どのようなニーズを持っているのかを見極めるのは非常に難しくなっています。特にインテリアの世界は周辺環境の変動が激しく、常にお客様の嗜好を把握することに努め、他社より一步先を行かなければならないと考えています」（山崎芳孝社長）。

人は「家」で1日のうち多くの時間を過ごすことから、壁紙やふすま紙は健康に配慮し、環境にやさしい素材を使用しなければならない。そこで、山崎内装工業株式会社では時代にマッチした製品を工夫創造し、「室内や空間を美しく彩るとともに人の心に安心感・満足感を与える」、そんな織物壁紙やふすま紙を作り続けたいと、日々努力を重ねている。



壁紙の製造工程

### 自然素材で作られる織物壁紙

家の壁や天井などに張られる壁紙は、元々織物製が代表的であったが、昭和50年頃になると塩化ビニル樹脂製の壁紙が出始め、その後主流となっていた。現在壁紙の年間国内生産量は約7億㎡、そのうちの9割以上が塩化ビニル樹脂製の壁紙で占められ、繊維を主素材とする織物壁紙は250万㎡（3%強）程度である。

しかし、シェアは小さいながら織物壁紙は防音性や通気性、調湿性では塩化ビニル樹脂製に勝っている。そのうえ素材に有害物質が含まれていないことから、今後、消費者のニーズが高まる製品と位置づけられる。

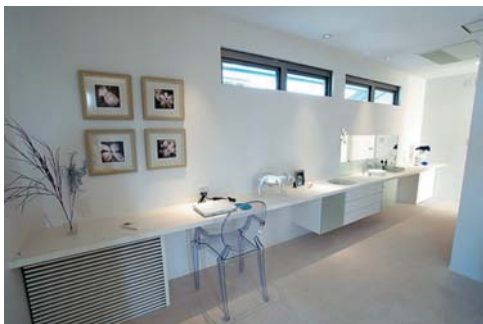
ところで、防火・撥水といった処理を施している壁紙は、何らかの薬品でコーティング処理がな



本社工場

されているが、同社のオリジナル壁紙「よろこび」は、薬品処理は行っていない。その理由は、薬品処理を行うことによって人の健康に害を及ぼすおそれがあることと、建築基準法では一般住宅には防火基準等の規制がないため、その必要がなく、したがって薬品処理を省くことでコストを抑えることができるからである。

同社の織物壁紙は、天然素材のオーガニックコットン、麻、シルク等で作られている。天然の素材を使用しているため焼却処理をしても有毒物質発生の心配はまったくない。また、織物と裏紙の張り合わせに使用する接着剤に可塑剤（フタル酸エステル類）を一切使用していないので、壁紙による環境ホルモン（外因性内分泌攪乱物質）の心配もない。



同社製品を使った壁紙の施工例

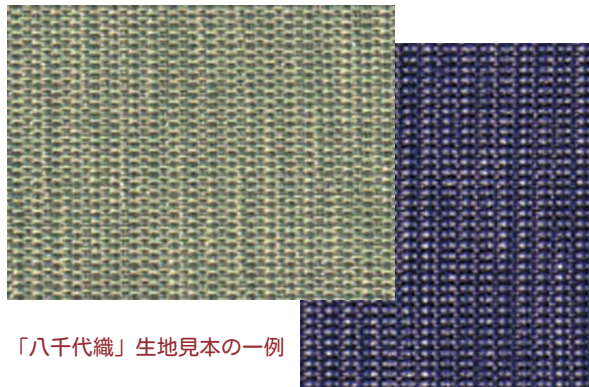
## 八千代織に代表される同社のふすま紙

同社のふすま紙の中で特に注目されるのが自社ブランド製品「八千代織」である。八千代織は高品質かつ歴史と伝統に裏打ちされたふすま紙で、先代の社長が命名したもの。八千代の言葉が意味する「永久」の栄えを祈ることから用いられたのではといわれる。

八千代織は昔からの工法でていねいに作られており、その品質の高さゆえ高級旅館を中心とした顧客からのオファーが多く、北陸地方の有名老舗旅館のふすまにも使われている。

また、施工業者からのクレームがないことも自慢できる点。壁紙やふすま紙はいわば半製品、表具職人の手で張られて製品となるものである。「実際に張ってみて施工しやすいことがよくわかる」と職人の評判も上々である。

このように、八千代織は、いまなお需要が衰えないロングラン製品となっている。もちろん天然由来の素材を使用しており環境への配慮にも抜かりはない。



「八千代織」生地見本の一例

## 健康や安全・安心をキーワードに

「壁紙やふすま紙は色、柄、材質などが豊富で数多くの種類があるため、以前は当方で選定すること（いわゆるおまかせ）が多かったのですが、最近ではアトピーやシックハウスなどの問題から、消費者が健康や安心にとっても敏感になっていますので、環境に配慮した当社の製品をお客様から直接指名されるケースが多くなってきています。」と山崎守彦、同社専務は語っている。

同社では今後も安全性や機能性を高めた商品の開発に注力していきたいと考えている。昔からの良いところは受け継ぎながらも、そこに新しい感覚や発想を取り入れていく。そして、常に消費者の自然派志向を考え、健康にこだわった製品作りをさらに進めていきたいという。現在、同社の売上構成はふすま紙6割に対し壁紙が4割である。今後もふすま紙をメインとしながら壁紙の生産も増やしていく考えだ。

また、木津川市で商売をしている以上、地元の木津川市の発展にも力を注ぎたいとの思いから新たな展開も考えており、例えば食の地産地消のように、地元の工務店とタイアップして「地元の製品を使って地元の業者が地元で家を建てる」といったことも計画中であるという。

（丸尾尚史、鶴山吉永）